

自分自身の話で恐縮だが、些細なことで一喜一憂することが増えてきた。気持ちの整理がつかないこと、割り切れない出来事は放置する。できるだけ嫌なことは考えないようにすることを習慣化してきた。心の奥に仕舞い込んできたことが、バグとして長年にわたり蓄積されたのではないか。これが精神的な余裕を失わせてのだと自己分析している。いずれにせよ私の器の容量が極めて小さいことが最大の問題だ。

このような思いで自己嫌悪にさいなまれていた時、惑星科学の研究者を取材する機会があった。宇宙の話聞きながら感じたのは、日々の生活との圧倒的な差。それが、自分の悩みがいかに小さいのか気づかせてくれた。すべてが悩みに値しないと思えた。立腹していた理不尽なことも、不安感も、すべてが広大な宇宙に飲み込まれていく。すがすがしい気持ちが蘇ってきた。久しぶりに充実した喜びに浸ることができた。

その直後に会った中小企業経営者は「忙しくて1日24時間では足りない」という。暇よりは多忙の方がいいはずだが、忙しさを自慢したいかのようだった。それなら、水星に行けば1日は4,224時間（地球の176日）もあると聞きかじりの話をする。経営者は目を丸くする。

水星は、自転より公転のほうが速いので1年は地球の88日分。1日に新年の挨拶を2回することになる。多忙さを宇宙の話に切り替えたのは無理があったかもしれないが1日24時間がベストで、効率よく過ごすことが重要だと、その場は結論付けた。

5年で大きく変化した日本経済

視点をどこに置くかで、捉え方は大きく変わる。日本経済の現状を客観的に見ると、株価は26年ぶりの高値水準にあり、有効求人倍率は43年9か月ぶりとなる1.55倍（昨年10月）になった。企業の純利益額は25兆円に迫り過去最高益だ。5年

前と比べ株高・円安など実体経済は着実に回復している。各種の経済指標は大きな経済変化を確実に示している。これはアベノミクス効果といえよう。

しかし、各中小企業団体や中小企業経営者から聞くのは「景気は緩やかに回復しているが実感がない」という言葉ばかり。景気回復の確かな手応えがないということだと理解するが、確かさを裏返すと、先行きの不安が払しょくできないという意味ではないのではないか。株価上昇はバブルの再燃を疑うし、指標の好転も格差の広がりがあるからという悲観的な先入観に支配されているように思える。

どうしても「みんなで渡れば怖くない」との発想があるのか、周囲を見ながら行動を起こす消極さを感じる。こうした現実を直視しきれずにいることで懸念されるのが、人手不足や生産性向上への取り組みへの遅れが生じることだ。景気回復の実感を待ってからの対応では、課題を膨らますだけになる。

東京五輪を前にした今年、来年にかけ景気が腰折れする可能性は低い、と多くの経済評論家は指摘する。今年は、秋に消費税引き上げの最終決定や米国の中間選挙などが大きなポイントになるだろう。また、海外の政治・経済動向には不安材料もある。それでも着実に進む日本経済の転換期を認識すべき時だと思う。



筆者紹介

海部隆太郎（かいべ・りゅうたろう）

法政大学卒。日本工業新聞社、IT企業勤務を経て独立。中小企業を中心に企業が抱える幅広い課題について取材活動を展開する。